分布：全国

ヌスビトハギ　（　マメ　科）

学名：*Desmodium podocarpum* subsp. *oxyphyllum*（デスモディウム ポドカルピウム オキシフィルム）

盗人萩　別名：ひっつき草，山馬蝗（さんばこう）

主な生育場所

平地から山地までの林縁や草地，路傍などに生育する。谷津田など，林縁が迫っている田畑の畦畔や，樹園地でも見られることがある。単生することは少なく林縁などにまとまって生えることが多い。

名前の由来：半月形の節果が2つ連なる果実の形を泥棒が忍び足で歩く足跡に見立てたとの説や，果実が気づかないうちに衣服などにひっつく様子から「盗人」を想起したなどの説がある。

特　徴

高さ60～120cmほどの直立する多年生。3枚の小葉からなる葉は長い柄を持ち，互生する。夏から秋にかけて枝先や葉脇から伸ばした花枝に3-4mmで薄紅色の蝶形花をまばらにつける。果実は節でばらばらになる節果で，種子1つを含む半月形で扁平な節果が2つ連なる。果実の表面には細かな毛が密生し，衣服などによくくっつく。

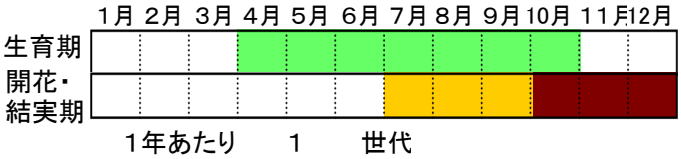
＜農業との関係＞

ヌスビトハギは「ひっつき虫」である果実の特徴から種子で拡がりやすいと思われがちだが，実際の群落を見ていると地下茎を形成して定着していることが多い。頻繁に耕起されたり草刈りが行われる畑内や畦畔などでは地下茎を充実させられずに，種子で侵入しても長期間にわたって定着することは少ない。類似種アレチヌスビトハギのほうがより繁殖力が強く樹園地などで雑草化しやすい。

への字形に連なる半月形の節果2つからなる果実

＜生活史＞

地方の例(目安)



＜類似種＞　関東地方以西には，ヌスビトハギよりも大型で花も大きく，5～6個の節果が連なる外来種アレチヌスビトハギが見られる。山地の林内には，小葉が幅広く倒卵形のマルバヌスビトハギ（在来種）が分布する。

外来種アレチヌスビトハギの花

＜一言うんちく＞

ヌスビトハギの果実の表面には短い硬い毛が密生していますが，拡大して見てみると，毛の先端がアルファベットのJを逆さにしたように鈎上に曲がっています。これは面ファスナー（マジックテープ）のフック面と同じ構造で，扁平な形状もあり毛織物の衣服に付くと剥がれにくいのです。

＜人との関わり合い＞

節果に入っている種子は豆果として食べられるようだが，小さく採集も面倒のため，利用されることはほとんどない。一方，生薬としては，山馬蝗（サンバコウ）として，中国では全草を咳止めや切り傷用に利用されるようだ。

また，名前に萩とつくが，花は地味で小さく観賞されてこなかったが，「ひっつき虫」としての果実はその特徴的な形状からも詩や俳句などの材料として関心を持たれ，下記に紹介するように宮沢賢治も作中で取り上げている。

＜俳句や短歌への登場＞

【季語：秋】 曲りゐる盗人萩の花の先　（京極杞陽）

てぶくろに盗人萩の実を付け来（辻　桃子）　躓きて盗人萩の名を覚ゆ　（松山足羽）

「（略）　はやしのくらいとこをあるいてゐると　三日月がたのくちびるのあとで　肱やずぼんがいつぱいになる」

宮沢賢治「春と修羅」の中から「一本木野」　※ヌスビトハギの果実を「三日月がたのくちびる」と表現。